浜松城跡 26 次調査の概要

2020 年 3 月

浜松市教育委員会

浜松城の概要

立　地　浜松城跡は、現在の静岡県浜松市中区元城町を中心に展開する、戦国時代から江戸時代にかけて使用された平山城です。JR浜松駅から北東へ約１kmという浜松市の中心市街地に位置し、浜松城と城下町は、現在みられる浜松市街地の基礎となっています。浜松城跡は、天竜川が形成した沖積平野を臨む三方原台地の東縁部に築城されています。浜松城の城域が最大の規模になった江戸時代には、東西600m、南北650mを測ります。最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かって、本丸、二の丸、三の丸と階段状に主要な曲輪が配置される連郭式の平山城です。浜松城跡とその周辺は入り組んだ谷地形や低湿地がみられ、それらの自然地形を活かして浜松城が築城されました。

歴　史　浜松城が所在する静岡県西部地方には、戦国時代から安土桃山時代にかけて使用された城郭が高密度に分布しています。これらの城郭群の中でも浜松城は天竜川平野に近接し、西遠江における経済や軍事拠点として重要視されました。徳川家康により1570年に築城されたのち、明治時代を迎えるまでの間、地域の拠点として整備・使用されました。浜松城の歴史は、大きく５段階に分けることができます。

第１段階は、浜松城の前身である引馬城が整備された段階です。築城時の城主は不明ですが、16世紀前葉には、今川氏配下の飯尾氏が城主をつとめました。引馬城は現在の浜松城公園の北東部にあたり、元城町東照宮とその周辺にその名残を留めています。

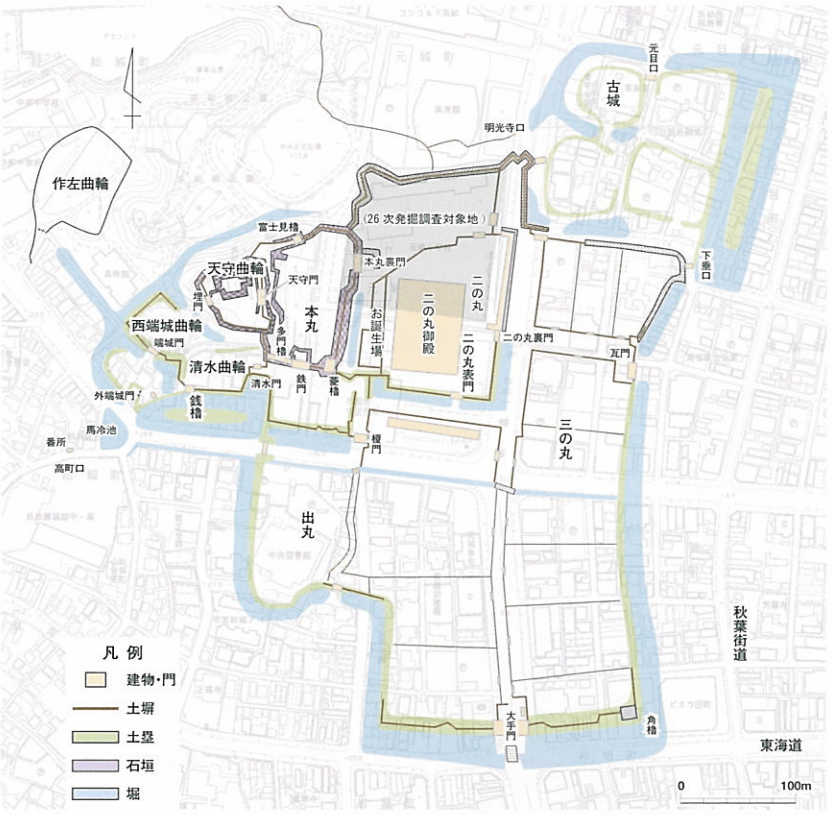
第２段階は、徳川家康が岡崎城から浜松城に拠点を移し、浜松城を整備した段階です。引馬城は浜松城と改称され、武田信玄に対する前線基地として拡張、整備されました。城の整備に伴い、城下町の整備も行われ、浜松城と城下町の原形が整えられたと考えられます。

第３段階は、徳川家康の関東移封後、豊臣氏家臣の堀尾吉晴が入城し、天守台をはじめとした大規模な石垣や瓦葺建物を整備した段階です。現在みられる浜松城の景観はこの時期に形成されたと考えられます。

浜松城跡の位置と周辺の城跡

第４段階は、徳川譜代の大名が治めた段階です。江戸時代の浜松城主は目まぐるしく替わり、江戸時代を通じて９家22代を数えます。江戸時代前期までには、浜松城の主要な施設の整備が完了していたとみられます。なお、天守は絵図に描かれておらず、すでに失われていたと考えられます。度重なる自然災害等で改修を重ねながら、幕末に至るまで地域の拠点として使用されました。

第５段階は、廃城になった明治時代以降です。明治６年（1873）の廃城令を中心とした時期に、浜松城の建物や土地は民間に払い下げられ、二の丸や三の丸は開発が進みました。大規模な改変を免れた天守曲輪と本丸の一部を中心として1950年に浜松城公園が開設され、1958年に復興天守建設、1959年には市史跡に指定されました。



浜松城跡復元図

年代	時代	段階	上級領主	日本史上のできごと	浜松城に関連するできごと
1100	平安				
1200	鎌倉			鎌倉幕府開く（1185）	
1300				建武の新政（1333） 室町幕府開く（1338）	
1400	室町（南北朝）	第1段階	今川など	南北朝合一（1392） 応仁の乱（1467-1477） 明応の政変（1493）	この頃、引馬城（浜松城の前身）築城か
1500					
1560				桶狭間の戦い（1560）	
1570	戦国	第2段階	徳川	三方ヶ原の戦い（1572） 足利義昭追放（1573） 長篠の戦い（1575）	今川氏真、飯尾連竜を殺害（1565） 徳川家康、遠江に侵攻（1568） 徳川家康、浜松城築城開始（1570） 徳川家康、三方ヶ原の戦いで敗北（1572）
1580	安土・桃山（織豊）			本能寺の変（1582） 小牧・長久手の戦い（1584）	浜松城修築（1578-1581） 築山殿と信康を殺害・秀忠誕生（1579） 徳川家康、豊臣秀吉の臣下となる（1586）
1590		第3段階	豊臣	小田原の陣（1590） 文禄の役（1592-1593） 慶長の役（1597-1598）	徳川家康、関東移封・堀尾吉晴、浜松領有（1590） 天守台、石垣、瓦葺建物などの構築
1600				関ヶ原の戦い（1600）	堀尾氏、出雲移封（1600）
1700	江戸	第4段階	徳川（譜代）	江戸幕府開く（1603） 一国一城令（1615） 徳川家康、没する（1616）	江戸時代にわたり譜代大名が浜松城主を務める（９家 22 代） 宝永地震（1707）
1800					安政地震（1854・1855）
1900	明治 大正 昭和 平成 令和	第5段階		大政奉還（1868） 太平洋戦争（1941－1945）	浜松城払い下げ（1872） 浜松城公園開設（1950） 復興天守建築（1958）・浜松城跡市史跡に指定（1959） 天守門復元（2014）
2000					

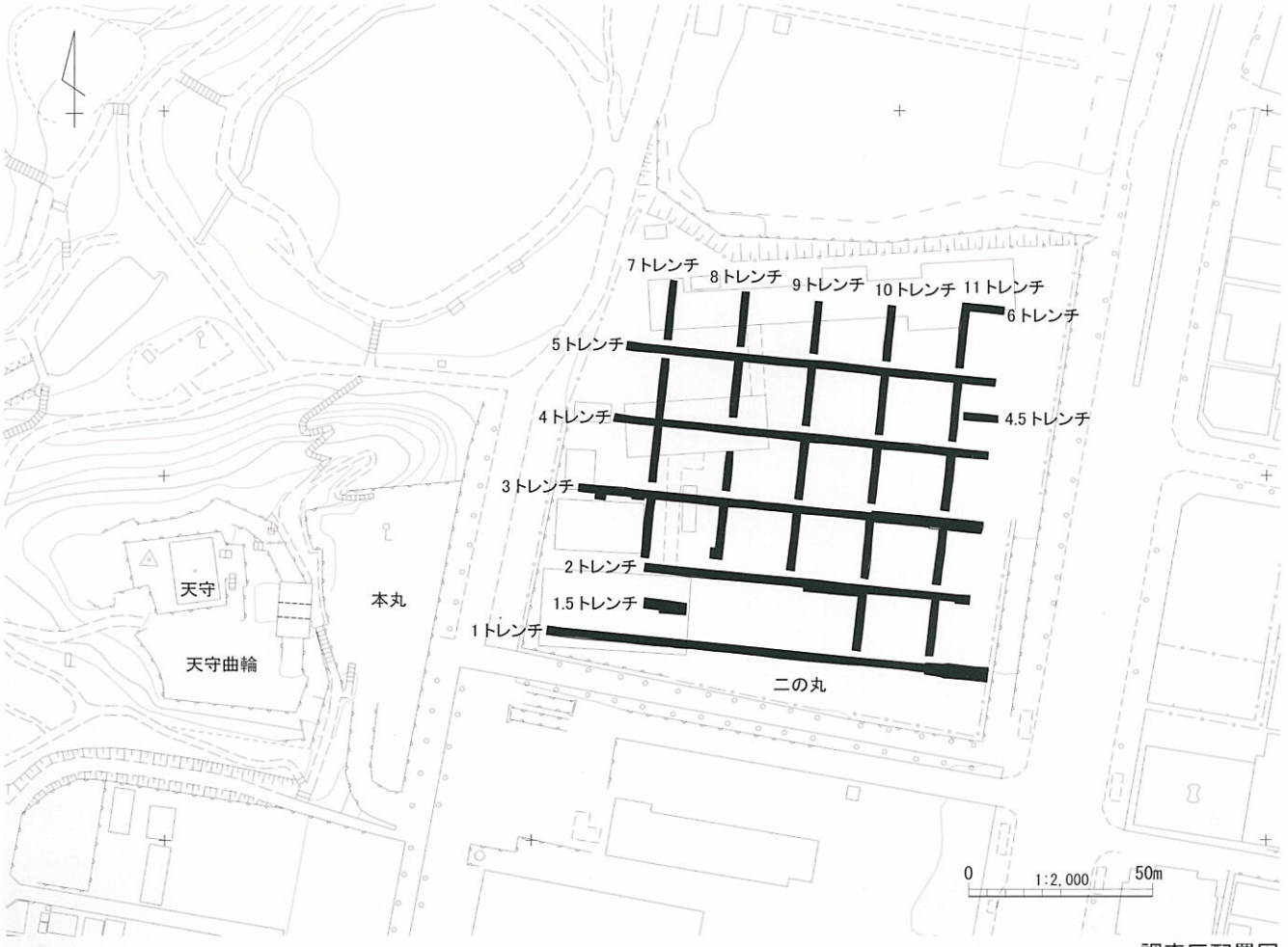
浜松城の歴史

調査の概要

調査地の概要　今回の調査対象地は、浜松城のうち、本丸・二の丸・２代将軍徳川秀忠が誕生した場所のひとつと伝わる御誕生場があったと推定されてきた地点です。浜松城の廃城後は、民有地などになり、開発が進められました。太平洋戦争後の 1948 年に浜松市立元城小学校がこの地に移転開設され、2017 年まで所在していました。

調査の方法と経緯　今回の発掘調査は、浜松市都市整備部緑政課の依頼を受け、浜松市教育員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、浜松市から支援業務を受託した株式会社フジヤマが実施しました。今年度は、浜松城跡にかかわる痕跡の残存状況や深さ、範囲、量などの内容を確認するため、対象地全域を対象として、幅２ｍの調査区（トレンチ）を 20 ｍ間隔の格子状に 11 箇所設定しました。また、より詳細に状況を確かめる必要がある部分においては、補足トレンチを設定し調査を行いました。バックフォーを用いて表土や近代の土層を層位毎に掘削し層位毎に遺物を取り上げました。近世以前の土層が残存している部分から下位は、遺構の有無を確認したのちに、必要に応じて幅 50 ㎝程度のサブトレンチや近現代の攪乱を利用して下層の状態を観察し、土層の形成時期や、遺構面の数、埋没地形等を確認しました。検出遺構は、原則として平面検出に留めましたが、一部の小穴や堀跡などにおいては、深さや規模の確定を目的として、部分的に掘削を伴う調査を実施しました。調査は、令和元年（2019）６月 20 日から令和２年（2020）３月 19 日まで実施し、約 2,000 ㎡を調査しました。

今回の発掘調査によって、本丸や御誕生場、二の丸の範囲と構造を復元できる調査成果が得られました。また、礎石や礎石を据え付けたとみられる痕跡等が確認でき、二の丸御殿やその周辺に整備された建物の痕跡が残存していることが明らかになりました。このほか、６箇所の瓦溜りや堀跡などの遺構を検出しました。調査対象地には、浜松城跡にかかわる痕跡が広く埋没していることが明らかになりました。



調査区配置図

基本層序

今回の発掘調査では、調査対象地全体の層序を、土層の特徴や時期をもとに大きく５つに分けて捉えることができます。

Ⅰ層　Ⅰ層は現代の造成土です。Ⅰ層はさらに２層に分けることができます。

Ⅰ-1層は、褐色砂礫土や褐色土を用いた元城小学校の造成土です。小学校の校庭にあたる部分では、褐色土の下層に砂礫層等が0.1m程の厚さで認められました。

Ⅰ-2層は、戦後から小学校が建設されるまでの間の時期に施工された造成土です。瓦礫やコンクリートなどが多く混じり、北西方向から南東方向にむかって斜めに堆積している箇所が多く認められます。

Ⅱ層　Ⅱ層は、焼土や炭化物、レンガ、近代の瓦、日用品などを多く含む赤褐色の土層です。太平洋戦争後に廃棄された戦災瓦礫を多く含み、この層を境に、下層が戦前、上層が戦後と捉えることができます。

Ⅲ層　明治時代（廃城後）から戦前の時期に形成された土層です。炭化物を含むにぶい黄褐色土層で、厚さは0.5m程です。レンガ造りの建物の基礎もⅢ層内に多く残存しており、当該地における戦前の土地利用の一端がうかがえます。

Ⅳ層　Ⅳ層は、江戸時代を中心とした時期の土層です。大きく３層に分けることができます。

Ⅳ-1層は、赤褐色砂礫土を主体とした整地層です。この層を掘り込む遺構が確認できます。遺構の中には、根固め石や礎石の抜き取り痕跡とみられるものがいくつか確認でき、二の丸御殿やその周辺施設に関わる遺構の可能性があります。

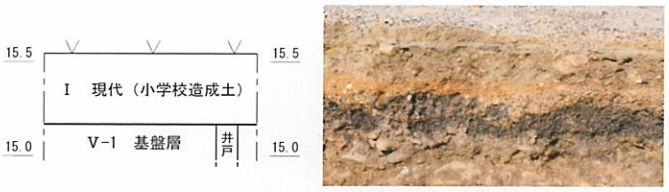
Ⅳ-2層は、赤褐色の砂礫土層です。0.3m程度の厚さで認められ、近世の造成土と考えられます。

Ⅳ-3層は、有機質で粘質の強い黒褐色土層が堆積してます。戦国時代以前の堆積土と考えられます。

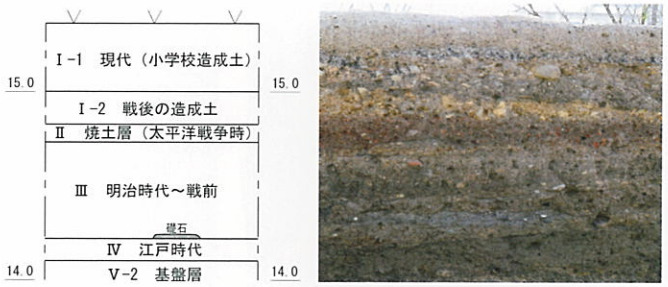
Ⅴ層　Ⅴ層は基盤層です。

Ⅴ-1層は、明黄褐色砂礫土で、上段（本丸）と中段（御誕生場）において認識できました。

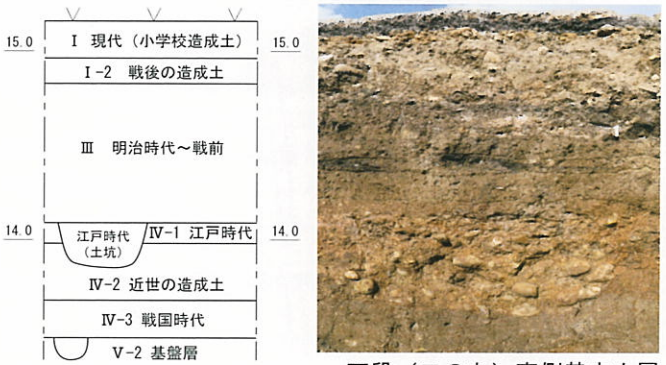
Ⅴ-2層は、明褐色粘質土の基盤層で、下段（二の丸）において認識できました。この土層の上面から掘り込まれた遺構も認められました。



上段（本丸）～中段（御誕生場）基本土層

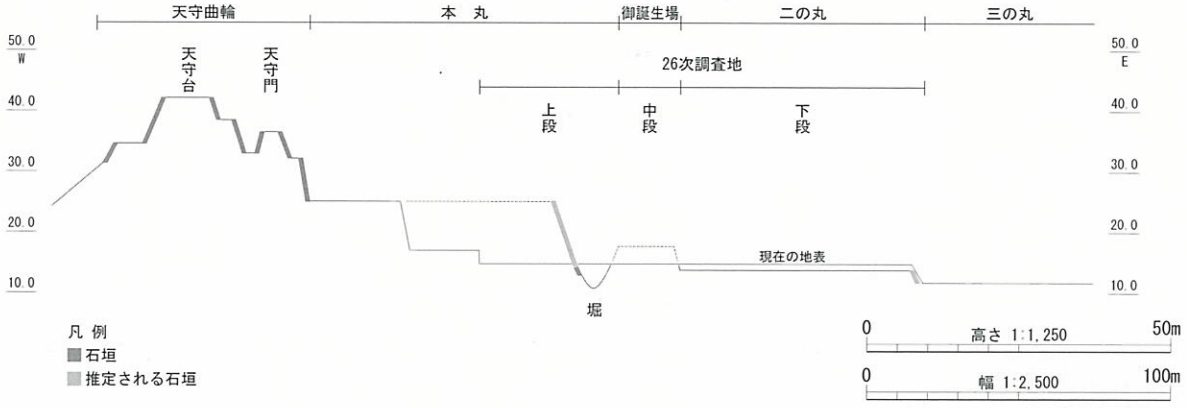


下段（二の丸）中央基本土層



下段（二の丸）東側基本土層

構造模式図



浜松城構造模式図

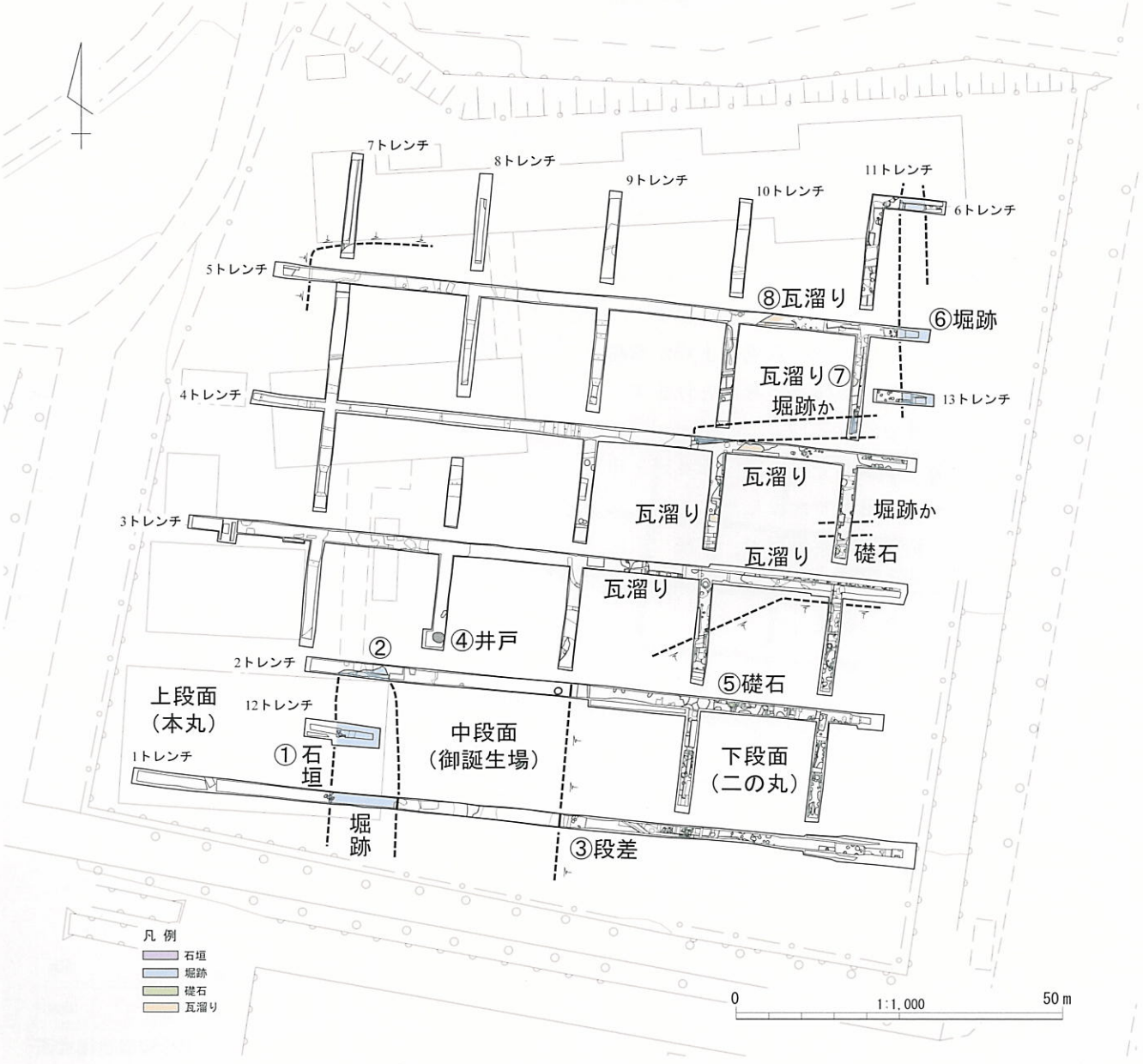
調査成果

①本丸東側石垣

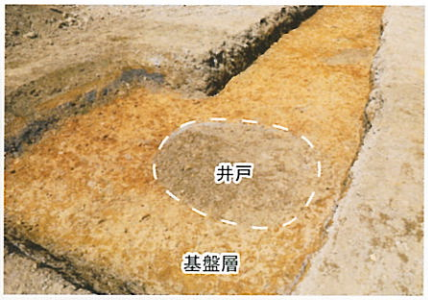
②本丸東側の堀跡

石垣と堀跡を確認

本丸東側に構築された石垣と堀跡を確認しました。石垣は崩れた状態でしたが、南北方向に延びていることを確認しました。石垣はチャートの自然石を用いて造られています。石垣の東側には幅約10mの堀跡があり、現況地表面からの深さが約４ｍあります。また、２トレンチで堀跡が途切れていることを確認しました。



③御誕生場と二の丸の境界



④井戸（2011年調査・2019年再検出）

御誕生場と二の丸の範囲を確認

敷地の東西で段差があることを確認しました。本丸東側石垣を含めると、上段面が本丸、中段面が御誕生場、下段面が二の丸にあたると捉えられます。御誕生場では井戸も確認できました。

⑦瓦溜り

⑤礎石

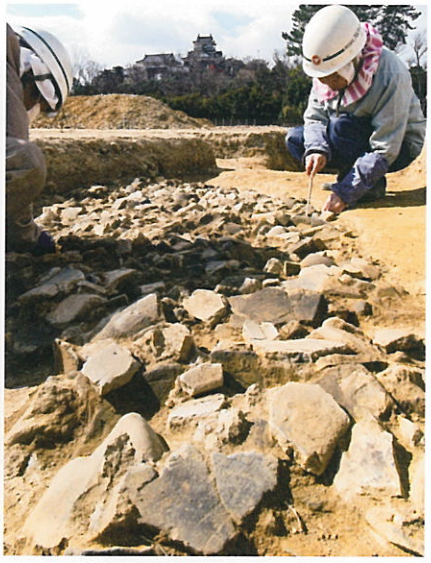
礎石を確認

礎石は、２石を確認しました。石材はチャートを使用しており、大きいもので長軸80㎝、短軸60㎝あります。また、礎石の抜き取り痕の可能性がある痕跡が平面や断面で確認できました。二の丸にかつて存在した建物の痕跡が残存していることがうかがえます。

⑥堀跡

堀跡を確認

南北方向に延びる堀を確認しました。堀の幅は約５ｍ、現況地表面からの深さは２ｍ以上あります。南北方向に延びる堀は、江戸時代（17世紀後半）に描かれた絵図である『青山家御家中配列図』に表現された堀である可能性も考えられます。



⑧瓦溜り

瓦溜りを確認

江戸時代の瓦がまとまった状態で出土しました。瓦溜りの出土状況から、二の丸外周部に瓦葺きの建物や塀があったことがうかがえます。また、家紋瓦や鯱瓦、鬼瓦などが出土した地点もあり、瓦が埋没した時期をうかがい知ることができます。

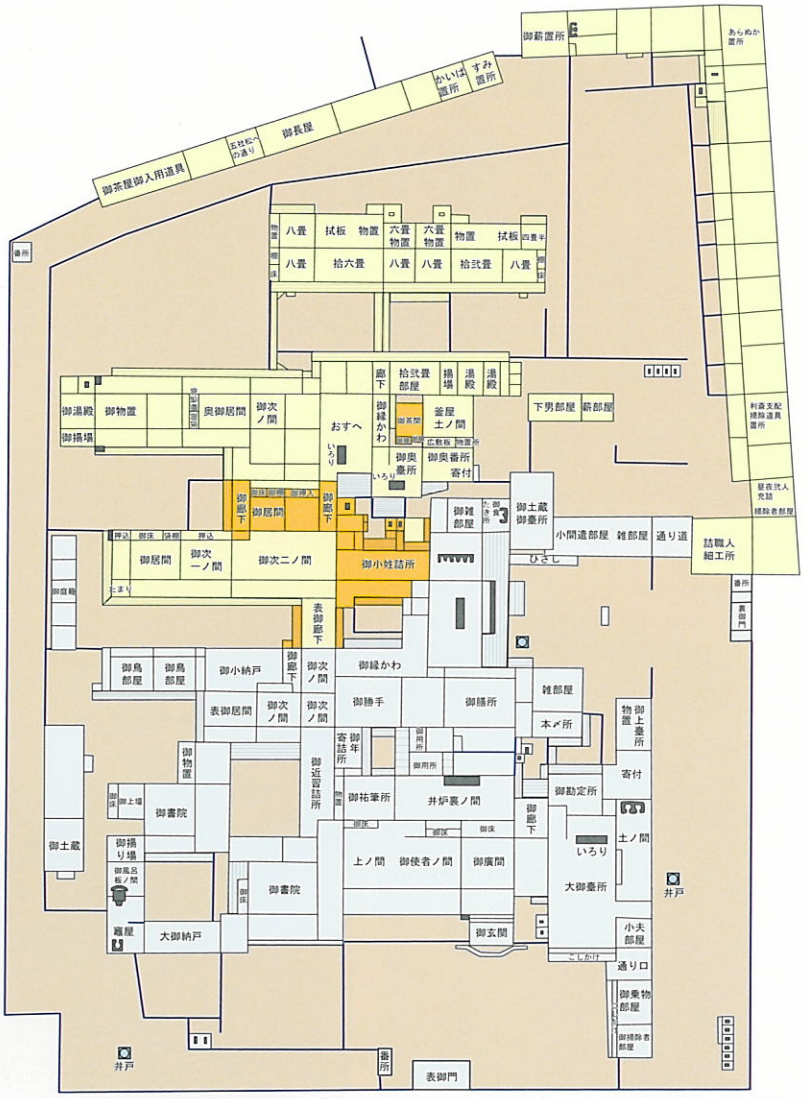
出土した遺物

二の丸からは、歴代城主が使用していた家紋瓦や鯱瓦、鬼瓦などが出土しました。また、当時の高級品であった茶道具や擂鉢などの日用雑器も出土しています。

課題と展望

かつて元城小学校が所在した今回の調査対象地には、浜松城本丸・御誕生場・二の丸およびその周辺施設の痕跡が残存していることが明らかになりました。今年度の調査成果を踏まえ、令和２年度以降はより詳細な発掘調査を行い、浜松城に関わる歴史情報を抽出する必要があります。なかでも、本丸東側に構築された石垣の範囲や残存状況の確認、二の丸御殿の構造や変遷の探求、二の丸周辺で検出された瓦溜まりや堀跡の範囲や時期の把握が大きな課題といえます。また、考古学的調査・研究にとどまらず、文献史学や歴史地理学などの調査成果を踏まえた学際的な研究を進め、豊かな浜松城像の構築が求められます。

調査地から大手門方向を臨む



二の丸御殿の構造（17世紀後半の浜松城二の丸図を基に作成）

報告書抄録

書名（ふりがな）	浜松城跡26次調査の概要　（はままつじょうあとにじゅうろくじちょうさのがいよう）
編著者名	和田達也・坂下俊介（編）
編集機関	浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466
発行機関	浜松市教育委員会
発行年月日	2020年３月19日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡（はままつじょうあと）	静岡県 浜松市 中区 元城町	22131	01-04-14	34度 42分 45秒	137度 43分 30秒	2019年６月20日 ～ 2020年３月19日	2,000㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城跡	城跡	戦国時代 安土桃山時代 江戸時代	石垣 堀跡 瓦溜り 礎石	瓦 陶磁器 土師質土器	本丸、御誕生場、二の丸の構造を復元できる調査成果が得られた。 浜松城にかかわる痕跡が残存していることを確認した。

発行　浜松市教育委員会
印刷　中部印刷株式会社　2020. 3. 19刊行